

16 世紀イタリアの彫刻論

大阪芸術大学 教養課程 教授 石井 元章

ルネサンス期のイタリアでは、古典語に精通した人文主義者のみならず、教養高い貴族のパトロンや、それまで職人とのみ見做されていた芸術家が、芸術に関する議論 (trattati) を行なうようになった。特にパラゴーネの名の下に諸芸術の比較が論じられた。Paragone は元々「比較」という意味だが、15、16 世紀のそれは「諸芸術間の優劣比較論争」と翻訳されることが多い。大論文の嚆矢は、万能人として名高いレオン・バッティスタ・アルベルティが著した数点の芸術論である。まずラテン語版の *De pictura* 『絵画論』が 1435 年に完成され、その後俗語版 *Della pittura* が着手され、他に主なものだけでも、1443 年から 52 年に著され、1472 年に加筆された『建築論』、おそらく 1462 年頃の著作と考えられる『彫刻論』を挙げることができる。同時期に彫刻家ロレンツォ・ギベルティが *Commentari* 『コンメンタリー』を著し、アルベルティと並ぶ「著述家としての芸術家」となる。これらの跡を受けて、16 世紀には多くの議論が集中する。歴史家池上俊一はその現象を、「反省して明確でまとまった言葉にするという行為が、芸術そのものが成熟し、あるいは危機を迎えている時期になって起きがちという、文化史通有の理由によるだろう」(池上俊一監修『原典 イタリア・ルネサンス芸術論』上下、名古屋大学出版会、名古屋 2021, (上)p.2.)と推測する。16 世紀の巻頭を飾るのは、1504 年にポンポニオ・ガウリコが出版した『青銅の鑄造術について』(Pomponio Gaurico, *De Sculptura*) である。報告者はこれを池上氏監修の著作の中で第一章のみ訳出したが(池上『ルネサンス芸術論』前掲書、上、pp.367-388)、現在日本学術振興会に全訳出版のための助成を申請中である。著者のガウリコはギリシア語文献を研究する人文主義者であるが、余暇に青銅彫刻の鑄造を行っており、古代文化を象徴する文学と彫刻を結びつけて、文学の知識を散りばめながら鑄造について語ることが、著者の目的であった。その点で、アルベルティやギベルティのように、芸術家が大論文を書くのとは異なる。一方、1521 年から 1543 年にかけてマルカントニオ・ミキエルがパドヴァ、ヴェネツィア、クレモナなどの街の収集品を見て周った記録をまとめた『美術品消息』(*Notizia d'Opere di Disegno pubblicata e illustrata da D. Jacopo Morelli, a cura*

di Gustavo Frizzoni, Bologna, Nicola Zanichelli 1884) は、16 世紀前半において古代・当代の彫刻がどのように見られていたかをよく伝える重要な資料である。この史料はヴェネツィア、マルチャーナ(聖マルコ付属)図書館司書ヤコポ・モレッリが発見し、1800 年に『美術品消息』の名で刊行した興味深い経緯を持つ。彫刻と絵画のパラゴーネに関して重要なのは、1547 年にベネデット・ヴァルキがアカデミアの集会所であったサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂において 2 週に亘って行なった 2 つの講演である。これらは 1550 年にコジモ・デ・メディチ直属の出版業者トレンティーノから刊行された。そのうち『第 2 の講演』は「彫刻と絵画ではいずれがより高貴であるかが論じられる」と題されているばかりでなく、ヴァルキが講演前に予め数人の美術家に意見を聞いた返事が添えられている(Barocchi, *Scritti d'Arte del Cinquecento, III Pittura e scultura*, Einaudi, Torino, pp.493-544)。小佐野はこれについて詳細な検討を加えた(小佐野重利「原典資料紹介 ベネデット・ヴァルキ『彫刻あるいは絵画の、いずれがより高貴なりや』(第二の論議)」『西洋美術研究』no.7 (2002), pp.133-150)。ヴァルキは最終的に、両分野が同等であることを示すと同時に、レオナルド、ラファエロ亡き後、ティツィアーノを代表とするヴェネツィア派と、ミケランジェロをリーダーとするトスカナ＝ローマの流れが対比された状況を踏まえて、両分野の「取り繕い」を目指しつつも、「彫刻が絵画に優越し、より一層高貴であるという見解へと傾い」たと小佐野は結論する。この彫刻優位論に加担したのが、1549 年にアントン・フランチェスコ・ドーニの著した『素描論』(池上『ルネサンス芸術論』前掲書、上、pp.389-401)である。ドーニは彫刻と絵画の関係は、自然と芸術の関係と同等であるとして彫刻の優位を認めるが、共にディセーニョという共通の起源に帰納すると述べる。彫刻家ベンヴェヌート・チェッリーニも彫刻を高く評価した。彼は、彫刻が *veduta* (眺められる面) や「多観面性」を持つが故に絵画より何倍も優れていると論じる(池上『ルネサンス芸術論』前掲書、上、pp.441-456)。かくして、16 世紀半ばになると彫刻と絵画のパラゴーネは、彫刻優位へと傾いていく。